祈りの心

菅野憲道著

〈目　次〉

祈りの心……1

現代人の祈り……1　祈りと感応……3　顕益と冥益……5　名聞名利と祈り……7
祈りと感得……9　よき師よき法よき檀那……11

現代に生きる信心……15

色あせた現代社会の理想……15　単純で強欲なアメリカ文化……19
知識偏重と感性・情緒……20　キリスト教信仰と天地創造説……22
国家神道と廃仏毀釈……25　一念三千と妙法受持……28
現代人の自我と本来の自己……30　円満具足の妙法……31

（『聖道』二二六号（平成29年2月一日発行）より転載）

祈りの心

平成29年1月22日　源立寺法華講役員研修会講義

現代人の祈り……1
祈りと感応……3
顕益と冥益……5
名聞名利と祈り……7
祈りと感得……9
よき師よき法よき檀那……11

一、現代人の祈り

現代日本は無宗教を自認する人が多いという。それでも初詣での人数が合計9,939万人(2009年度警察庁発表)などと聞けば、無宗教＝確信的無神論者と言うわけでもなさそうで、その多くが宗教に無関心といったほうが適切かと思います。

とりわけ江戸時代の寺請制度と明治以降の国家神道による宗教統制によって、国幣、官幣大社等に敬礼する事は国民の義務として強制されましたから、多くの国民が、その祭神や教義がなんであるかなどと知る事もなく、社会儀礼や習俗の一こまとして、これを無自覚的に受け入れてきたことが、日本人の宗教意識に影響している事は否めません。

しかし、信者でもない人々が神社仏閣に詣でて、いったい「何に」「何を」を祈るのでしょうか。メディアなどに取り上げられる多くの参拝者の姿を見て私はいつも不思議に思うのです。ここでは、「何に」という問題や、小銭を神仏に投げつける賽銭(さいせん)への疑問はさて置くとして、「何を」祈るのかという点に絞って考えてみたいと思います。

寺社に参拝した人が、心の中で念じる祈りとはどんなものでしょうか。ある寺社の御祈祷案内を見ると、どこでも似たり寄ったりですが「良縁、金運、開運、厄除、合格祈願、交通安全、商売繁盛、必勝祈願、身体健全、病気平癒、家内安全……」などと書かれていて、どんな願いごとでも受け入れてくれそうです。

人々はこうしたメニューにしたがって、心の中で願い事の注文書を差し出すのかもしません。しかし正月や祭日だけは大人数が押しかけ、それぞれが勝手な注文書を突きつけても、神様もとまどうばかりでしょう。

いったいこの数え切れないほどの欲張りな注文書はどこへいってしまうのでしょうか。

ところで日蓮大聖人は、こうした宗教の低俗化を見事に言い当てて「減劫御書」で次のように述べられております。

・今の代は外経も、小乗経も、大乗経も、一乗法華経等も、かなわぬよとなれり。ゆへいかんとなれば、衆生の貪・瞋・痴の心のかしこきこと、大覚世尊の大善にかしこきがごとし。

譬へば犬は鼻のかしこき事人にすぎたり。又鼻の禽獣（きんじゅう）をかぐことは、大聖の鼻通にもをとらず。ふくろうがみみのかしこき、とびの眼のかしこき、すずめの舌のかろき、りうの身のかしこき、皆かしこき人にもすぐれて候。

そのやうに末代濁世の心の貪欲（どんよく）・瞋恚（しんに）・愚痴のかしこさは、いかなる賢人聖人も治めがたき事なり。其の故は貪欲をば仏不浄観の薬をもて治し、瞋恚をば慈悲観をもて治し、愚痴をば十二因縁観をもてこそ治し給ふに、**いまは此の法門をとひて、人ををとして貪欲・瞋恚・愚痴をますなり。**

譬へば火をば水をもってけす、悪をば善をもって打つ。しかるにかへりて水より出でぬる火をば、水をかくればあぶらになりて、いよいよ大火となるなり。

今末代悪世に世間の悪より出世の法門につきて大悪出生せり。これをばしらずして、今の人々善根をすすれば、いよいよ代のほろぶる事出来せり。

これを要するに時代の進展とともに、人間の自我が発達して知識も豊かになるが、貪欲心、瞋恚、愚癡の煩悩もますます強くなってきますから、古代からの素朴な宗教や道徳では、時代も人々の機根も適わなくなってしまいます。人間は次第に自己中心的になり、欲望は深く、自尊心も強くなる傾向がみられると指摘さ

れます。したがって、諸の宗教は人々を人間性の向上へ導くべき役割を果たさず、低俗な心に迎合するような呪術や祈祷、あるいは我見や慢心を正当化するような教理によって、反って災いと混迷をもたらすようになってしまうともいいます。

実際に戦前の国家神道がもたらしたものは軍国主義と亡国という悲劇でした。また、戦後、信教の自由が保障され、多くの新興宗教が拡がりましたが、そこからもたらされた風潮はエゴイズムの蔓延ではなかったでしょうか。人々の心が悪化することによって世は乱れ、災いが起こり、そのことが更に人心悪化をもたらして悪循環に陥るということです。

また現代は科学技術が急速に進化し、ネットや通販など日常生活も劇的に変化しつつあります。それらの変化に人間の精神が追いつかないことや、競争が激化して情報の洪水に流され、精神的にゆとりがなく、物事をじっくり考える時間もないため、心は貧しくなり、内省心も乏しく、宗教にはおのずから疎くなり、ますます煩悩の病が重くなっているのです。

二、祈りと感応

なにかを「祈る」ということは、どういうことでしょうか。ふだん無宗教の人でも、生死の分かれ道に立たされたような場合、人間の力を超えた何か大きな力＝神仏に対し、思わず祈るという心理になるようです。意識しなくとも「祈る」という心が生まれます。しかしその時は必死の祈りも、一時的で一方通行の感情におわり、「のどもと過ぎれば熱さを忘れる」の例で、すぐに忘れてしまうものです。

その祈りが叶うかどうかは、感応ということ知らなければなりません。神仏との交感には、受け止める側

の感受性という問題があります。

およそ、音楽や芸術作品から受ける印象は、作家の表現力にもよりますが、受け止める側の感受性の比重も大きいのです。感動とか感銘、共感等は一人々々みな異なるものです。また同じように、恩とか善悪、美醜など、その人の感性というフィルターを通して心に感ずるものです。したがって他人に何かお世話になっても何とも思わない人と、恩に感じてこれに応えようという人がいるわけです。

その場合、修因感果とか業感といいまして、その人の過去の経験や業が大きく作用します。修羅や畜生界のように闘争本能に共鳴しやすい傾向性や、おいしい話や儲け話に飛びつきやすい餓鬼の心など、その人の感性によっては、僅かなことがきっかけになって心のありさまが一変するものです。また画家を志す人は、技術よりも、何度も対象物に接して、美とか存在についての感性を育てる事が基本だといわれます。

であれば、神仏の感応を得ようと思えば、神仏に通ずる心がなければならない事はいうまでもありません。「法華初心成仏抄」には、感応ということについて、次のように仰せられております。

・譬へば籠の中の鳥なけば空とぶ鳥のよばれて集まるが如し。空とぶ鳥の集まれば籠の中の鳥も出でんとするが如し。

すなわち妙法蓮華経の本仏の感応に預かろうと思えば、妙法蓮華経を一心に受持する外はないのです。妙法蓮華経を受持するとは仏心を持つことの謂いでもあります。よく「子どもを育ててみて、初めて親の心が分かった」という事を聞くことがありますが、自分が親心を持ったときに、父母からのメッセージの真意が分かったようなもので、絶えず発せられている本仏からのメッセージも、受ける側に仏心がなければ、感受して共鳴することはないものです。宗祖は次のようにも仰せられております。

・汝今一念随喜の信を致す、函蓋相応感応道交疑ひ無し。（聖愚問答抄）

・御いのりの叶ひ候はざらんは、弓のつよくしてつる(絃)よはく、太刀つるぎ(剣)にてつかう人の臆病なるやうにて候べし。あへて法華経の御とがにては候べからず。（王舎城事）

三、顕益と冥益

つぎに祈りの形について考えてみます。これについては「道妙禅門御書」がよく知られております。

・祈祷に於ては顕祈顕応・顕祈冥応・冥祈冥応・冥祈顕応の祈祷有りと雖も、只肝要は、此の経の信心を致し給ひ候はば、現当の所願満足有るべく候。

というものです。私どもの信仰生活も、普段は冥祈冥応といって、朝夕の御観念文以外はあまり個別的な願い事などはしないものです。ところが大聖人の御生涯が、竜口法難や雨乞いの逸話のように、あまりにも劇的で、因果応報、賞罰覿面のように見えるため、一部には祈祷仏教のように誤解されて、何でも念力を込めて祈願すれば感応の現証があるという、密教的呪術のようなとらえ方をする人々もおります。

これについて「教行証御書」などによれば、末法の下種仏法は冥益を本としております。同書に「**冥益なれば人是れを知らず見ざるなり。**」と仰せられるように、凡夫の我見の前には、一つの現象が本当に利益をもたらす事か、それとも何れは災いをもたらす事になるのか、なかなか分からないものです。「人生万事塞翁が馬」ともいうように、幸運と思った事が不幸の始まりであったり、得したと思った事が大損につながったりするものです。ですから、はっきりと個別的な願い事を定めて祈り、それに即応する効果があったとしても、それは仏法の本筋ではないのです。日蓮大聖人は真言等の祈祷を批判して「畜類を本尊として男女

の愛法を祈り、荘園等の望みをいのる。是の如き少分のしるしを以て奇特とす。」（星名五郎太郎御返事）とも、また「法門をもて邪正をただすべし。利根と通力とにはよるべからず。」（唱法華題目抄）とも仰せられ、祈祷の効験という欲心で道を誤ることのないよう戒められておられるように、日常生活における名聞名利の祈りは、たとえ叶ったとしても、根本的な利益、本当の功徳とはならないのです。

本仏の願いは、親が幼児を護り育て一人前の大人に導くように、一切の人々を一人残らず成仏させようというものです。その御心を深く信ずるならば、あれこれ請求をするよりも、本仏の御計らいを信じ、まじめに生き、何事も修行と心得るような祈りこそ、本仏の御心に叶うのではないでしょうか。これについて日興上人も次のような古歌を引いておられます。

心だに誠の道にかないなば祈らずとても神や守らん

勿論、日蓮大聖人も、時に応じて当病平癒や厄年の息災延命等を、檀越の請いに応じて祈ることは多々あります。しかしそれは当人が正法への信心を深めて、成仏への道につながる場合に限られ、不信や謗法の祈りは厳に戒められているのです。ですから、たとえ今世において金運や出世・長寿などの世俗的願望が満たされなくとも、畜生界でもない、餓鬼界でもない、一生成仏という人間として最尊の人生を歩めることこそが大冥益と心得るべきなのです。

また世俗的にはむしろ受難や貧道、病苦など、苦難の中にある方がより仏道に近いのかも知れません。安逸や怠惰の中に仏道はありません。「報恩抄」「開目抄」にはこれを以下のように教えられております。

・極楽百年の修行は穢土（えど）一日の功に及ばず。

・我並びに我が弟子、諸難ありとも疑ふ心なくば、自然に仏界にいたるべし。天の加護なき事を疑はざ

れ、現世の安穏ならざる事をなげかざれ。

四、名聞名利と祈り

ところで、子ども達に大きくなったら何になりたいのと聞くと、ケーキ屋さんとかお嫁さんとか、色々な答えが返ってきます。中には仮面ライダーやキュウレンジャー等とアニメのキャラクターだったりします。またよくある話では、自分は本当は橋の下で拾われてきた子で、どこか遠くに両親がいるというような妄想の類いもあります。このような子どもの頃の空想の延長として、成人してからでも願望や妄想の類いがどこかに残っているものです。ですから神仏に祈る場合でも、漠然と「金持ちになりますように」とか「好ましい異性と結ばれますように」などという願望も多いようです。これは自分の妄想から出ている場合が多く、たなぼた式の僥倖に期待する心理ですが、これでは何ともなりません。夢と現実を混同すればするほど、地道な努力とか、自己評価などがおろそかになります。

また、幼児が欲するままにお菓子やオモチャを与えるような親は、けして良い親とはいえません。ましてや駄々をこね大騒ぎして親を困らせ、やっと手に入れたオモチャでも、一週間後には見向きもしないものです。貪欲という煩悩は一時的に欲求を満たしても、それで本当に満足する事はなく、多くの場合さらなる欲望につながるのです。

中村うさぎという作家が欲望について述べたエッセイを読んだ事があります。流行作家となって印税が入り、大金を手にしてブランド品を買い漁ったといいます。いきつけの有名高級店に入ると、上得意として特別丁重に扱ってくれる事に快感を覚えて、必要の無いものを手当たり次第購入し、買い物は袋や箱から出す

事もなくそのままクロークに積み上げ、箱包みで一杯になったそうです。人間には他人から認められたいという承認欲求が根強くありますから、お金持ちにみられたいとか、大物にみられたいとか、そういう欲求が一時的にでも満たされるような気がし、自尊心がくすぐられて快感を感じたそうです。その結果、買い物依存症となり、一億円以上はあった印税もたちまち遣い果たして、原稿料の前借りでしのぐうちに借金で火の車になったといいます。それでもこりることは無く、欲望の向かう先は、次ぎにはホストクラブに通いつめ、またその次ぎには美容整形にはまったそうです。しかしそれでも欲望が満たされる事はなく、いまでも飽くなき欲望追求の旅を続けているような内容でした。

仏教ではこれを名聞名利といって、仏道修行を妨げ、悪道に引き入れる蜃気楼のようなものとして戒めてきたのです。正しい宗教は人々の願いを何でも叶えてやるというようなものではないはずです。人として向上させるようなものでなくてはならないはずです。欲望のアリ地獄から救うのが真の仏教のはずです。そのためには、それらの祈りや願望が本当に正しいものなのかどうか、一時的な感情や妄想から起こってくるものではないのか、このことに本人が自然に気がつくような信仰と教えの体系がそなわっているはずなのです。ですから、日蓮大聖人は、

・賢人は八風と申して八つのかぜにをかされぬを賢人と申すなり。利(うるおい)・衰(おとろえ)・毀(やぶれ)・誉(ほまれ)・称(たたえ)・譏(そしり)・苦・楽なり。をを心(むね)は利あるによろこばず、をとろうるになげかず等の事なり。此の八風にをかされぬ人をば、必ず天はまぼ(守)らせ給ふなり。(四條金吾殿御返事)

・名聞名利は今生のかざり、我慢偏執は後生のほだしなり。嗚呼(ああ)恥づべし恥づべし、恐るべし恐るべし。(持妙法華問答抄)

と訓戒され、十四誹謗や十悪等でも売名、虚飾、慢心、打算、著欲などが戒められるわけです。

祈りの心は、法華経の一念信解の心に叶ってくれば、おのずから浄化されて、一生成仏と一切衆生の成仏を願う弘法の誓願に収斂（しゅうれん）されてくるはずです。その心は世俗的な御利益信仰からの脱皮して無上仏道への志、誓願へと向上してくるはずなのです。よく知られた「白米一俵御書」の「仏になり候事は、凡夫は志ざしと申す文字を心へて仏になり候なり。」の御文のごとく、仏法のため、世のためという志しこそが、菩薩の四弘誓願にも共通する唯一の祈りなのです。ちなみに大聖人ご自身の祈りはどうであるかといえば、次のように語られております。

・日蓮は少（わか）きより今生のいのりなし。只仏にならんとをもふ計りなり。されども殿の御事をばひまなく法華経・釈迦仏・日天に申すなり。（四條金吾殿御返事）

五、祈りと感得

それでは、一生成仏や利他の精神に基づいた祈りは、どのような功徳をもたらすのでしょうか。これについて宗祖はたびたび分別功徳品を引かれて、一念信解の功徳が五波羅蜜の功徳を越えるものであることを説かれ、その功徳として法師功徳品などに説かれる六根清浄をあげられます。これを「御義口伝」では

・法師とは五種法師なり。功徳とは六根清浄の果報なり。所詮 今日蓮等の類、南無妙法蓮華経と唱へ奉る者は六根清浄なり。

と説きます。ここでいう五種法師とは、如説修行のことを指し、結論から言えば一念に妙法蓮華経を信受することなのです。この妙法を受持できることは成仏の種子を受持することで、このことによって煩悩に染ま

った一念が浄化され、妙法蓮華経の当体として蘇生するのですから、これを眼・耳・鼻・舌・身・意の六根清浄とも表現されているのです。このことは、有名な方便品の広開三顕一の文に「諸仏世尊は、衆生をして仏知見を開かしめ、清浄なるを得しめんと欲するが故に、世に出現したもう」とあって、あらゆる仏の願いが一切衆生の成仏にあり、衆生を清浄ならしめるために出たという経説にも符合します。

したがってもし真に妙法蓮華経を無二に信受する事ができれば、我慢偏執のフィルターが掛かった邪見の感受作用ではなく、見聞覚知する世界も、仏智による本有の実相の正見となり、その振る舞いも仏心による慈悲の行為となるものです。いうまでもないことですが、濁悪の心、すなわち憎しみや恨み、妬み、僻み、怒り、貪ぼり、不安、苛立ちなどの感情はすっかり浄化された明朗な心の世界です。

このように妙法蓮華経を受持し、この御本尊に祈る感応は、一念三千の理からも、当然一心清浄という功徳がもたらされることになるのです。いいかえれば心の浄化とでもいえるでしょう。「一生成仏抄」では

・然る間仏の名を唱へ、経巻をよみ、華をちらし、香をひねるまでも、皆我が一念に納めたる功徳善根なりと信心を取るべきなり。（一生成仏抄）

また、同じく、自分の一心、一念の状態を忘れて、外界に財宝や夢を求めても、叶わぬ祈り、叶わぬ夢なのです。たとえ手に入れたとしても、たちまち色あせてしまう夢です。まずわが己心にいかなる法を持つのかそれが問題で、これによって、その感受作用は全く違ってくるからです。たとえば自分の体臭にはなかなか気がつかないのと同じように、心の状態が病的状態におちいっても自分では正常だと思い、外に問題があるように考えるものです。しかし、すべての本因は己心にあるのです。同書には、

・若し心外に道を求めて万行万善を修せんは、譬へば貧窮の人、日夜に隣の財を計へたれども、半銭の

得分もなきが如し。（一生成仏抄）

とも仰せられております。

六、よき師よき法よき檀那

祈りの心という事で、色々な角度から述べてきましたが、最後に祈りの形について考えてみます。一般的に、祈りという行為は純粋に個人的な行為のように考えられます。しかし日蓮大聖人は「法華初心成仏抄」では、

・譬へば、よき火打とよき石のかどとよきほくち(火口)と、此の三つ寄り合ひて火を用ゐるなり。祈りも又是の如し。よき師とよき檀那とよき法と、此の三つ寄り合ひて祈りを成就し、国土の大難をも払ふべき者なり。

よき師とは、指したる世間の失無くして、聊かのへつらふことなく、少欲知足にして慈悲あらん僧の、経文に任せて法華経を読み持ちて人をも勧めて持たせん僧をば、仏は一切の僧の中に吉き第一の法師なりと讃められたり。吉き檀那とは、貴人にもよらず賤人をもにくまず、上にもよらず下をもいやしまず、一切人をば用ゐずして、一切経の中に法華経を持たん人をば、一切の人の中に吉き人なりと仏は説き給へり。吉き法とは、此の法華経を最為第一の法と説かれたり。

と述べられて、よき師、よき法、よき檀那の三つが一致して祈りが成就すると説かれております。そうすると、祈りには、真実の仏法と正しい導師と正直な信心という、三要素が揃わなければ祈りとはならないということになります。ここで良き師とは、いうまでもなく日蓮大聖人を指します。よき法とは三大秘法の仏法

であり、この御本尊様です。よき檀那ということが問題です。

ところで一般仏教でも無意識下に我癡・我見・我慢・我愛の四煩悩を抱えていると説きます。そうすると、この盲目的な自己愛の殻を破ることが成仏への道でもあります。祈るということも、多くの人は「自我」というものが他者や環境と無関係に、それ自身で独立して存在しているように思い、その「自我」が何かに向かって祈るというようなとらえ方をします。しかしあらゆる現象が因縁果報の中での一時的な現象ですから、「自我」というものも環境や他者との関係性の上になりたっているのです。したがって「祈る」以前に「祈られている」存在なのかも知れません。

大聖人の仏法を受持することは、南無妙法蓮華経の法本尊と、日蓮大聖人の御内証としての久遠の本仏に、常に見守られ、祈られているのであり、これに気づき、これを信ずるならば、やがて必ずその報恩のための祈りへと向かうはずです。そして私達の願いも、やがて大聖人と同じ祈りの心に昇華していくに違いないのです。

自他彼此の執情のない信が、個人的な「自我」の殻から解き放たれて、やがて人類全体の「自我」に、一切衆生の「自我」に、更に妙法蓮華経の法界と一体となった「自我」にまで及んでいったとき、真理と知恵と慈悲の世界が広がる事を、宗祖のお姿が示されていると思うのです。

熱原法難に際して、若き南条時光に宛てて励まされた御消息文には以下のように示されております。

・つゆ(露)を大海にあつらへ、ちり(塵)を大地にうづむとをもへ。法華経の第三に云く「願はくは此の功徳を以て普く一切に及ぼし、我等と衆生と皆共に仏道を成ぜん。（上野殿御返事）

この本仏の祈りとも云うべき一文こそ、至高の祈りであり、私達もこのような祈りの心を起こして、その一分でも身読したいものであります。

（合掌）

平成二十八年十一月十二日　聖道寺御会式御正当の砌

布教講演「現代に生きる信心」

源立寺住職　菅野憲道

色あせた現代社会の理想……15
単純で強欲なアメリカ文化……19
知識偏重と感性・情緒……20
キリスト教信仰と天地創造説……22
国家神道と廃仏毀釈……25
一念三千と妙法受持……28
現代人の自我と本来の自己……30
円満具足の妙法……31

（『聖道』二二六号（平成29年2月一日発行）より転載）

皆さん、本日は御会式、大変おめでとうございます。

車でお参りさせてもらう途中、空を見上げましたら、ちょうど刷毛で引いたような薄雲が広がっていまして、誠に諸天善神が寿いでいるような聖道寺さんの御会式だと思うのであります。これもひとえに、皆様方、聖道寺講中の純真な信心を結集して、立派に御会式を務められるからだと思うのであります。

さて、今日の講話は角度を変えまして、具体的な我われの日常生活に即したお話を申し上げたいと思うのであります。

題しまして「現代に生きる信心」というタイトルで、お話を申し上げたいと思います。

「現代に生きる信心」と申しましても、これは私自身の信心の受け止め方でありまして、私はこういうふうに信心ということを考えているんだ、という事について、ご参考までに申し上げるわけでありまして、必ずしもこの事が大聖人のご本意に適っているかどうかについては保証の限りでは無いのです。ただ、私はこういうことで信心をしているんだという事でお話を申し上げますので、何らかの参考になるのではないかと思うのです。どうか、その点よろしくお聴き取りいただきたいと思います。

色あせた現代社会の理想

さて、最近のいろいろなニュースを読んでおりますと、一喜一憂することが多いのでありますけれど、とりわけ残念だったのは、アメリカの大統領選挙での講演会で、ヒラリー・クリントンさんとドナルド・トランプさんが大統領選に向けて、それぞれの抱負なり、政権構想を語って討論する予定だったんですけれども、スキャンダルの暴露合戦で、その辺の痴話げんかみたいな状態で、非常にがっかりした次第です。

本来、アメリカの大統領というのは、アメリカ一国のみならず世界中にまで影響を及ぼす、大変に責任の重い職だと思うんですね。もちろん、日本もどちらかというと、アメリカの属国みたいなところがありますから、アメリカの大統領が誰になるかという事によって、或いはどのような政策がとられるかによって、我われの生活にも大きく影響してくるわけです。

それがほとんど、いわゆる政治哲学なり、政策論争が行われずに、まるで、修羅界のような口喧嘩、言い争いに終始したことは、この先、非常に思いやられるような気がするのであります。しかも、それがですね、ドナルド・トランプさんとか、ヒラリー・クリントンさんの個人的な資質だったらともかくとしても、トランプさんを支持している人達が大勢いるという事ですね。だいたい、支持率がいつも四十何パーセント確保しているわけですから、そういう人達を思うと、アメリカ国民って一体なんだろうって思うんですね。

我われはアメリカに戦争に負けて以来、彼の国を理想化して日本の国も物質主義になって来たわけですけれども、今後もアメリカを手本としてやっていけば、いずれはそういう国民意識に近づいてゆくでしょうから、そうすると、アメリカの文化が実質的にどれほどのものかということを考えなければならないと思うのであります。

よく一部の人からいわれる事ですけれども、アメリカはたいへん粗野な国でありまして、例えば、幾つかの例を挙げますと、いわゆる強欲資本主義といわれるような競争社会ですね。

本来ならば、フランス革命以来、近代社会は自由、平等、博愛ということをスローガンとして来たわけですね。しばしば、日米同盟外交で同じ価値観を共有するといわれますね。それは自由とか人権という価値を重視する考えですね。

しかし、その自由な競争ということは、やがて

アメリカ国内の格差問題、日本よりひどいと言われる貧困問題、そういった弊害がひどくなってきて不満が渦巻いていることは見逃せない事実だと思うのです。

また、いわゆる市場原理主義などといいまして、自由な競争を理想化します。すると自由競争ということは、言い換えれば弱肉強食の世界ですから、だんだん畜生界みたいな様相が広がって、ハンデもつけない不公平なパワーゲームになってくるわけであります。

ここ数十年来、アメリカ社会も中間層が没落し、民度も荒れて、教育・医療・治安も劣化し、無差別殺人事件であるとか、薬物のはんらんとか、社会全体が低迷しているように思います。

国外的にもアメリカは自由とか民主という理念を他の国に対しても求め、アラブの春という夢を描いて、アフガン・イラク以外にリビアとか、エジプトとか、シリアとか、いろんな所で反政府勢力を支援して政権を倒してきたわけですけれども、その結果、多くの国々が混乱状態に巻き込まれて難民が急増するという事態になってしまったわけです。

中には、ビンラディンみたいに元々はアメリカが支援した勢力が、やがてアメリカ文化を敵視して、いろいろなテロシーンを起こしているわけです。それ以来、テロとの戦いと大義が、中東・アフリカで内乱状態を引き起こし、テロを世界に拡散し、多くの難民を生み出して、ヨーロッパの方にまで影響してくるようになってしまったんですね。

私はそれを見て、結局のところ、アメリカの一番頼りとしているのは、経済力と軍事力ではないかと思うんですね。決して理念や価値としての自由とか、平等とか、人権とかでは無いんじゃないかと思ったんですね。自由や民主主義、それは単なる建前であって、本の表紙みたいなもの、中味

は覇権主義、いわゆるアメリカが二十年後、三十年後もナンバーワンの国でいられるように、或いは世界中の保安官として統制が出来るだけの軍事力、経済力を持ち続けられるようにという戦略で進められてきているんだと思います。

ちなみに自由、平等、博愛というようなことはですね、今ではアメリカや欧米諸国の専売特許のようなことをいっていますけれども、これはフランス革命の起きる以前から、日本においては仏教思想として元からあるものです。御存知の「乃至法界平等利益」という観念文をみても、きわめて深い平等・博愛の精神がそこに籠められているのです。

自由というのはちょっと、見方が違うかもしれません。自由というのは今は個人が法律を犯さない限りは何をやっても干渉しないという、個人の自主性を最大に認めるような思想ですね。しかしその事が身勝手な個人によって社会不安が引き起しされ、大多数が迷惑する側面もあると思うんですね。何があっても個人の自由だと言うような事が、銃規制の問題とか、薬物汚染や、差別や分断につながってくるのだと思います。

自由というのは本来、フランス革命なんかの場合、圧政とか独裁政権とか、或いは理不尽な封建制から解放するという、人間解放というものであったわけです。

ところが昔の日本では、自由という言葉は身勝手という意味で、あまり良くはとらえられていなかったですね。もし仏教の立場でいえば煩悩からの解放、すなわち解脱という内面的な自由を目指したわけです。凡夫の心の中には怒りの心とか盲目的な欲望とか、或いは愚痴の心とか、衝動的欲求や、慢心のように心の中で縛られているものがあるというんですね。そういうものから解放する。

だから人間解放といっても、社会体制からの解放でなくて、自身の内面的迷妄からの解放という

事を目指すわけです。もちろん、それは、自由・平等・博愛や、勤勉、謙譲の心というようなことも、それは欧米でいわれる以前から、日本では大事にして来ているわけです。

だから、日本は、幕藩体制から近代国家にスムーズに変わる事ができたのは、仏教思想、例えば惻隠の情とか、合理性、協調（和）とか信義など『心こそ大切なれ』という、仏教や儒教が培ってきた豊かな精神的土壌があったからこそ、その上に平等とか自由とか平等というものが、割にスムーズに受け入れられて来たのではないでしょうか。

だから、いま考えてみると、日本の国は欧米列強に伍して比較的短時間に自由主義陣営としては非常に成功を収めることになったのです。

単純で強欲なアメリカ文化

そういうわけで、アメリカというのは元々新しい国家でありまして、独立戦争から百年ぐらいしていわゆる西部開拓時代となり、急速に発展します。ところで我われの若い頃には西部劇を映画館やテレビでしょっちゅうやっておりましたけれども、最近ほとんどやらないでしょう。あれは今となっては放映できないんですね。インデアンとかアパッチが悪者で、保安官や騎兵隊が悪をやっつける。ちょうど、鞍馬天狗が正義の味方で、新撰組などをやっつけるような、そういう極めて政治的な差別のメッセージが裏付けられているからなのです。しかも、無法者の世界の中にですね、正義の保安官がいて、個人プレーでケリをつける。裁判所も弁護もない。これは私刑（リンチ）であって、わたくしに成敗するということは法治国家としては非常に相応しくないわけです。

いずれにしても、先住民族に対する差別思想が濃厚にあって、また奴隷制度も残っているような時代でしたから、問題となってあまり上映されな

くなってしまったわけです。

しかしアメリカが繁栄したフロンティア時代、いわゆる大開拓の歴史というのはゴールドラッシュの歴史ですね。一攫千金を求めていろんな人が、ワーッと一斉に新天地めざして競争するわけですから、思想や文化の中身は拝金主義と言っても差し支えないくらいに、一攫千金。今でもそういう気風というのが残っていまして、人に先んじて成功し一代で巨財を成して人も羨むような大富豪になることがアメリカンドリームといわれますね。

日本の伝統ではそんなものは成金で、どちらかというと蔑視されてきたような文化もあるわけですね。日本人の場合は『心こそ大切なれ』といってお金では買えない人間性、品格や信念など精神性を重んずる価値観、わび・さびや清貧・隠者の伝統文化があったからこそ、日本では極端な拝金思想は見られなかったと思うんです。

そうはいうものも戦後七十年も経ちますと、日本もアメリカンドリームみたいなものに影響されて、とにかく財を成すことや有名人になることが人生の目的になっているようです。

結局のところ、現代人の多くは、無宗教で自己中心的、物質主義にすっかり染まってしまって、なんか問題のあった時も自身の内面が問われないで、社会や政策が悪いから、或いは相手のせいだという話にすり替わってしまうようです。

しかし、どれだけ政策や設備を整えたとしても、それを実際運用するのは人間ですから、その人がどういう事に価値観やポリシーをもっているかが問われるのだと思うのです。

知識偏重と感性・情緒

更に問題なのは、知性偏重と言いますか、知識偏重ということもあるんじゃないかと思います。

昔から教育では知育、徳育、体育といわれていましたが、感性とか情緒、或いは直感力、そうい

うものもバランス良く育てるという事が教育の目標じゃなかったでしょうかね。

だいたい、今どきは恩を知るという心についてですね、父母の恩というような事ですら、忘れ去られているようです。恩を知るということは必ずしも道徳教育でやったから分かるものじゃないんですね。感謝というように、いわゆる感性というものが非常に問題になってくるわけです。

これはまた、後でお話ししますけれども、法華経の信仰は決して論理的、知識的に解説されたものじゃなくて、どちらかというと、感応とか一念随喜ということをもって表現されております。

ですから例えば、恩を感じるという事は、知識として恩を知っているという事じゃないと思うんですね。感じるということは人によってみんな違うんです。また真・善・美のような価値も、決して「美」という物体があるわけでなくて、美しいと感じる心にあるわけです。自然の光景、たとえば海を見て「あー素晴らしいなー」と感動する人もいれば、不安に感じる人もおります。ですから、何にどう感応するのかという事が、非常に大きな問題になってくるわけです。

ドイツ観念論のカントが「知」「情」「意」とか、或いは理性、感性、悟性ということをいわれているんですが、人間というのは決して知識ばかりじゃなくて、むしろそれ以前に、パッと見た瞬間に分かってしまうような、そういう直感力であるとか、或いはそれまで何も思わなかったけど、フッとしたことで大きな感動を覚えたというような「感ずる」ことが非常に重要なんですね。

ところが、そういう知性とか、情緒とか、感性というのは、円満にバランスよく育てるということはなかなか難しい事でありまして、例えば何十年か前にインドでオオカミに育てられた少年というのが発見されまして大騒ぎになった事がありましたけれど、オオカミに養育されれば全くオオカ

ミのような感性、行動を取り入れてしまうんですね。

それと同じように、人はどういう家庭環境とか、社会環境であったかとか、さらには宗教・思想であるとか、そういった諸々の背景があって、初めて知、情、意とか感性が形成されます。

実際のところ知性や知識は優れているけれども、偏った人間は結構いるのであります。東大を出て教授になりながら痴漢や万引きで捕まったとか、権力欲の固まりで冷酷な人間だとか、そういう自己抑制できない人たちがいっぱいいるんですね。いろんな依存症や鬱病は現代人に蔓延しております。何故、そういうようなことになってしまうのか。指導的な立場にいる人でも、なぜ品格・見識がともなわないのか。やはり感性とか想念などの心の内に、欠落したものや歪んだものを抱えているに違いないんです。だから、本当の意味で良質の人間になろうと思ったら、そういうものをバランス良く育てなければいかんと思うんです。

キリスト教信仰と天地創造説

そういう人間形成の背景に、どういう事があるんだろう。先ほども言いましたように、アメリカという国は物質主義だと言うんですけれども、物質主義というのはある意味でば、キリスト教に対する反動として起きた主義ですが、キリスト教そのものは今でもかなりアメリカ社会に浸透しておりまして、例えば大統領の就任式にはバイブルに手を置いて、神に誓ってアメリカの国を守るというような事を宣誓するわけです。また皆さん方がもし、アメリカに帰化しようと思ったならば、必ず「神の名において誓う」という宣誓させられる。日常的に「オー、マイ、ゴッド」とやっているわけですからキリスト教の影響力はいまでも大きいですね。しかしキリスト教が欧米人の人間観や世界観に、どれほど大きな影響を及ぼしているかに

ついては、あまり考えたことが無いんじゃないんかと思うんですね。

キリスト教の基本的教義は旧約聖書の冒頭、創世記というのがありまして、そこで神が天地を創造したことが説かれるわけです。

じゃ、天地創造とは何かというと、創世記によれば神が一日目に暗闇がある中に光を作り出した。それによって昼というものが出来上がった。その次に二日目には空を創った。三日目には大地を創って海が生まれて植物を生えさせた。四日目には太陽と月と星を創った。五日目には魚と鳥を創った。六日目に神は獣と家畜を創り、神に似せて人を創った。六日目に人間が創られたんですね。七日目には神はお休みした。休養した。それでいまだに日曜日がお休みという事になるんですけれども。こういう素朴な神話というか、おとぎ話が書かれている。それを信じている人が大多数なわけですね。だからわれわれ人間は神様に創られたものだと思っているわけです。

しかも、それがいつの時代かというと、英国の国教会では紀元前四千四年前の十月二十八日と日まで確定しているんですね。四千年前に天地が作られたなどという説は、宇宙物理学とか考古学、進化論等をもちだすまでもなく、現代人の感覚からは信じられるわけがないはずです。もちろんそれ以外の教派でも諸説がありましても、例えばロシア正教会などには紀元前五千五百八年前にこの宇宙が出来上がったと認定している。キリスト教の大筋は約三千年前から五、六千年前位にかけ、神によってこの世界が創造されたというのが基本なのです。

面白いことにこの天地創造説はですね、たとえば宇宙物理学のビッグバン理論のような宇宙誕生説と、キリスト教の天地創造説のどちらを信ずるかというアンケートをとってみるとですね、ある統計によると58パーセントがキリスト教の天地

創造説を信じているという結果がでているんですね。

欧米人の心理の中に、自分たちはアダムとイブの子孫として生まれてきたという意識があるわけです。いうなれば、一つにはアダムとイブの原罪を背負っているという事。二つ目には神との契約の下に生まれたんだという信仰が前提としてあるわけです。だから、それらのことが人生観とか価値観とか家族観等、もろもろの事に影響してくるわけです。

例えば向こうの人達は、日本人、東洋人みたいに先祖の事は言わないでしょう。死んでしまったら供養も回向も関係無いんです。死んでしまうどころから、死ぬ前から、例えば高齢者の施設があるんですね。ひとつの町がですね、何千世帯という単位でお年寄りばっかり暮らしている町があるらしいです。そういう所へ息子さんたちが尋ねてくるということはほとんど無いそうです。お年寄りの方もそれで当たり前、子供は子供、自分は自分という社会ですね。

私は、アメリカ社会が家族の関係という以前に、神と自分という個人主義的な契約に基づいて、つながっているんじゃないかと思う。だから人間同士の信頼関係とか家族関係みたいなものは非常に希薄で、契約がすべてなんだなと思うんですね。

そういうわけですから、結婚でもそうですが、日本人の場合、言葉にしていわなくとも、態度から何となく感じて自然に信頼や一体感も生まれるという考え方なんですが、アメリカはそうはいかないんですね、愛情から財産から関係性に至るまで全部言葉で確認し、契約として結ばれるわけだから、契約に違反すると簡単に離婚という事になってしまいます。「縁」などという見方はないようです。

日本人は非常に複雑・微妙な心を大切にする文化でして、例えば、以心伝心のような、「言わな

くても分かるじゃないか」というような、わざわざ曖昧さを残す文化ですが、そういう事はアメリカでは絶対通用しないですね。全て一から十まで全部言葉に出して表現して、神を介して契約を結ぶ事によって成り立っている社会なのです。

そういうふうですから、もともと人間観が単純で、損と得、敵と味方、彼と此れ、神と人というような二元論的な考え方、ビジネスに成功して大金をつかみ贅沢して暮らすぞというような金満的人生観、現実がすべてというような人生観が生まれるのも無理からぬ事だなーと思うんですね。西部劇の中に出てくる保安官のような、単純な正義感、単純な夢、分かりやすいといえば、わかりやすいんでしょうけれども、精神的な深みが感じられない文化、情緒にとぼしい文化でもあるわけなんですね。

国家神道と廃仏毀釈

そういうわけで、私はいつでも「アメリカ人て、単純で粗野だなぁ」って思っているんですけれども、じゃ日本人はそういうことを笑えるかというと、実は日本人も笑えないんですね。日本人も、幕末・明治から敗戦までは「皇国思想」というものを、徹底して叩き込まれています。日本人は皆、天皇の臣民であり、皇国の民であるとされていた。これは御書のなかにもでてくるんですが、日本の国の歴史書というのは古事記と日本書紀です。

古事記は七一二年、奈良時代に入ってすぐ、その後八年ほど遅れて日本書紀が成立しますが、その中に天孫降臨の建国神話がでてきます。これは歴史学者などによれば、壬申の乱、蘇我入鹿の乱で歴史書が焼失してしまったので、六五三年、四十代天武天皇が、再び編纂を企てたものと考えられ、大和朝廷の統治権力を正当化するために作り出された神話と考えられております。だから、今の歴史眼からは大体十五代天皇あたりから以降の

記述は史実にもとづいた伝承でしょうが、それ以前の事は全く神話（創作）だと見られている。古事記、日本書紀の記述には「天神七代、地神五代」のこと、つまり旧約聖書の天地創造説と似たようなことがあって、天神の最初は国常立尊（クニトコタチノミコト）といい、その子孫が七代続いて混沌の中から天地を開闢した。やがて地神の最初は天照大神（アマテラスオオミカミ）という事になるんです。それが五代ほど続いて、それから神武天皇として人皇第一代となる、神武天皇も天から下ってきてその国を作ったという神話です。

明治25年、久米邦武という当時の歴史学の第一人者が「神道は祭天の古俗」（古代の習俗）として国家による神道祭祀を正当化しようとしたら、神道者から「不敬だ」「無礼だ」と攻撃され帝大教授を追われることがありましたが、当初から近代の天皇制は国家神道よる宗教的権威をもって絶対化され、タブー視され、国民教化のイデオロギーとされてきました。

たとえば明治23年に橿原神宮が創建され、昭和15年には昭和天皇が来られて、皇紀二千六百年をお祝いした。初代の神武天皇が即位してから二千六百年、万世一系の天皇陛下は現人神として、日本を統治する世界にも類を見ない神聖な国だというんです。これでは歴史ではなく国家神道の教義です。

この橿原神宮にしても明治神宮にしても、平安神宮にしても、或いは湊川神社とか、明治になってできた有名な神社が多く有ります。国家神道も、いわば新興宗教なのです。当時の日本が欧米列強に対抗し、キリスト教に侵略されないよう、八百万の神々を皇祖神を頂点とするヒエラルヒー（ピラミッド型の階層）に統一再編する過程で、国策で創建したというのが実情なわけです。

天孫降臨とか万世一系などという教義は、我われ現代人にとっては、まったく荒唐無稽な話です。

しかし戦前までは誰もがそれを受け入れて、批判はできなかった。ただ天皇陛下の赤子として神話をありがたく崇めて、「七生報国」を誓うことが国民のつとめだとされた。今の時代ですから、こんなことを言っても不敬罪で捉えられることはないんですが、戦前までは特高や憲兵にたちまち逮捕されかねない話です。

「七生報国」は湊川神社の楠正成の話です。史実は分かりませんが、楠正成親子が桜井で親子の別れをする。お前は田舎に帰って楠家の後を継いで天皇をお守りしろ。自分は湊川に行って討ち死にして、七たび生まれ変わって国の為に報いる、という太平記の説話が室町時代に出来上がる。そのストーリーが後々大変な影響力を持ってくる。幕末から明治には後醍醐天皇の建武の中興にならって王政復興の夢を掲げた浪士を駆り立て、大正、昭和は軍人の理念・理想のような話に利用され、楠公のイメージだけが一人歩きするわけです。

権力闘争で勝利を収めた者は、正当化のために都合良く歴史を書き替え、論功行賞をおこないます。宗教教団もまたこれに迎合し、民衆統治に都合の良い模範的人物の物語とか神話によって撫民に協力するわけです。

「自分は何であるか」認識する場合、ふつう人間であると思うのでしょうが、人間である以前に日本人であるとか、神に仕える者であるとか、愛国者であるとか、そういう教育がなされることでもって、だいぶ人生観や価値観が変わってくるんではないかと思うんです。

いまでも、このような皇国思想を奉ずる人が一部にはおります。しかし、時の政治権力によって作られ、半ば強制的に与えられる人間像というのでは普遍性、公平性を持ちえません。

古事記や日本書紀は奈良時代に入って成立したんですが、日本にはそれ以前、飛鳥時代、白鳳時代から仏教が伝来して、その思想信仰が浸透して

おりました。日本人の精神形成に慈悲とか国際性とか平和な共栄を願う和の精神を形成してきた事が、まだまだ知られていないんじゃないかと思います。

とりわけ明治の時に「廃仏毀釈」が起こって、神仏分離が命令されました。

皆さんもたまに奈良の古寺をめぐることがあるかと思いますが、古いお寺の宝物館に行くと必ず、頭の無い仏像とか、手足のもげた仏像が置いてある。私は初め、それは古いから破損してしまったのかなと思ってた。ところが唐木順三が書かれた書物を読んでいたら、村人たちから「これはみんな明治の廃仏毀釈の時に破壊した、その痕だよ」と聞いたと書かれておりました。私はそれが真相だと思います。仏教を弾圧して、王政復古のスローガンを掲げて国家神道を最上位におき、宗教的権威をもって衆生を統制支配する、ということがあった。当時のナショナリズムが、国家神道の天孫降臨のような虚構の信仰によって、さらに独善的で偏狭な流れとなっていったように思います。

もとより大聖人の仏法は、国家権力よりもっと上位のものとして説かれております。「法主国従」といって法（真理）が上で、国家権力はそれより下だという事を言われる。明治維新の際、もし為政者が仏教精神を受け入れていたなら、もうちょっとマシな歴史になったんじゃないかという気がします。

一念三千観と妙法受持

仏教に説かれている世界観は三千大千世界という説があります。今の宇宙物理学からいっても遜色のない世界観だと思います。また時間的な概念にしても、法華経で五百塵点劫とか、久遠即末法の本時という概念が説かれると、時間や空間でさえ相対的な概念である事が示されます。神道とかキリスト教なんかとは比較にならない合理性や思

想性をもっております。

仏教は、キリスト教や神道のような底の浅い仮説ではなく、現代の学問が到達した水準に少しも矛盾しない深さ、時にはそれを凌駕する内容をもっております。

それも方便品の「唯仏與仏　乃能究盡」という経文のように、仏法の真実は仏の悟りの中の話ですから、われわれ凡愚の理解だけに頼っていては追いつかないことなんですね。

「久遠」とか「一念三千」という無窮無尽の真理を、人間の限りある脳細胞で考えようとしても間に合うわけがない。我われの経験も有限です。ところが自然界や宇宙は無限の広がりと関係性を持っている。

そこで法華経では、以信得入といって、我われが知識や理解から入るんじゃなくて、諸法実相の妙法蓮華経を説き示された以上、直ちに妙法を真実の仏の悟りであると信じ、受持する、そのために、一念信解が大切だとされ、信念受持が要請されたのです。

その中身は五百塵点劫の久遠下種という概念や、名字初心、本因本果、教行証、内証外用、不読誦不造像、逆縁の慈悲などの教えで多面的に説かれております。それを大聖人は三大秘法の本門の本尊、戒壇、題目として顕わされ、また三学や三徳・三妙と教義で示されるのです。

我われが朝夕勤行の時に、御本尊様に向います。仏とは法界を仏身とされております。したがって十界互具、百界千如、一念三千の御本尊即南無妙法蓮華経の本仏であり、これを宗祖がご図顕遊ばされて、一切衆生に与えられたのです。

それは人間の計らいを越えて、超越的かつ普遍的な生きた真理として有るわけです。一草一木に至るまで一切衆生は妙法を具えているのですから、一心に南無妙法蓮華経と信じて唱えるなら、自然に仏界も具現するわけです。

現代人の自我と本来の自己

ふだん我々は自我の煩悩に振り回されてオロオロし、泣き笑いをしているわけですけれど、高い山に登って下界を眺め見たら、如何にも、小さなことでクヨクヨしている事に気づきます。

要するに、自分がもっと高く広い境地に立てばいま自分がいる位置を俯瞰的に見ることができるし、目先のことばかりで無く、長い目で見ることもできます。

人間は自我という執着からなかなか抜け切れないものがある。ところが例えば法然とか親鸞、道元等の教えはあくまでも個人的な救いしか問題にしませんね。

大聖人の仏法は「一身の安堵を思はば先づ四表の静謐を祈るべきものか。」とあって、一身だけで完結する人間などはありえない。個人という人間から、家族、職場、親族、国や社会、民族など、さまざまな関係性と時間の中に自分があるという立場です。

ところが現代人の個人主義は、利己主義に陥りやすく、自我を優先し過ぎますから、しまいには親子でも家族でも親しい人でもみんな他者として対立的に見てしまうんですね。

そうじゃなくて、本来の自分というのは、父母や家族があって社会があって人類全体があって、母なる自然があって、父なる宇宙があって……際限の無い流れの中で今の自分がいるわけです。そういうあり方を無視したのでは本当の自分の姿も見えなくなってしまうんですね。だから自分というものを捉える場合に、必ず全体的な関係のイメージ、有縁無縁の一切衆生まで、自分の世界として捉えていくような、いわゆる自我の執着を断ち切って、本当に自由な、解放された本来の自己に帰る、そういう信仰に立った時にはじめて法華経の信心に近づいたということがいえるわけです。

すると、今までいつも自己の煩悩で、自分中心に見るということしかしてなかったものを、仏様がどう見るか、或いは妙法から今の姿を見たらどうかという、そういう視点や感応が自然と生まれてくる。それのみならず、我われは御本尊様に「南無妙法蓮華経」と唱えるときは、境智冥合といいまして、我われも御本尊様の世界の中に入ると同時に、我が身も御本尊の当体となる。我が身が妙法蓮華経の宝塔となると教えられているのです。

円満具足の妙法

その本来の自己に帰ることは、本来の主師親に気づくこと、本当の仏を知ることでもあるわけです。自分の本心を失った衆生には寿量品の「此大良薬。色香美味。皆悉具足。」こそ必要なのです。すなわち良薬（信受すべき仏法）が煩悩の病を治すことができるのは、色も、香りも、味わいも三つとも備えていなければならないという。

なるほど、我われの人生観とか世界観の根底をなす一番大切なもの、信じているものがキリスト教や国家神道のように、木に竹を接いだような作り事だったり、矛盾や欠点だらけだったらしようがないんですね。

例えば、美味しいものでも、砂が入っていたりひどい臭い、汚物のような姿だったら食べられないじゃないですか。だから色も形も味わいもみんな備わってなきゃいけない。どんな正しいことでも、本当の慈悲が欠けているようでは本物ではないし、或いはそれが未来の子供たちにとっても良いことであるというように、思想信仰に、そういう真理（超越性）・智慧（普遍性）・慈悲（現実性）などが円満に兼ね備わっていなければならない。

そういう事をずーっと求めてゆくと、結局のところ法華経に説かれ、宗祖が御本尊様に示された

南無妙法蓮華経を無二に信じるということに帰着するわけです。むしろそこで、はじめて自分という自己認識、我慢偏執の心から解放され、闇の中に明かりが灯されるように本当の安心がもたらされるんだと思うのであります。

大聖人が御書の中で、しばしば強調されるのは『我慢偏執の心なく』とか『余事余念無く』とか『余事を交えず』とかですね。とにかく南無妙法蓮華経「一心欲見仏不自惜身命」という信念をですね、生命の底にまで確立することにおいて、地獄・餓鬼・畜生・修羅という命もおのずから浄化され、一生成仏も叶うわけです。

先日「ためしてガッテン」というＮＨＫの番組で、瞑想の効果というのをやっていました。その中で人は一日大体十八万四千項目くらいの事をいろいろ、ぐちゃぐちゃと考えているそうですね。それも過去のどうしようも無い事の繰り返しであるとか、未来に対するしょうもない不安とか、ありもしない妄想で、そんなことを年がら年中心配したり、後悔したりしていて、それだけで疲れて、わけが分かんなくなってくるという心理学者の説を紹介しておりました。お経にも似たような話がありますが、要は自縄自縛の状態をリセットするために、一心にお題目を信じてとなえる。ただし瞑想だけでは、実際は、中心が無いんですから、妄想がかえって酷くなることが多いのです。

我われも勤行しても、いろいろな雑念が出てきます。だから、なんとかして一心にお題目を唱える、とにかく余計なことを考えずに一心にお題目を唱える、余事余念なく唱えたなら、そこから開かれてくる世界があるんですね。そういうふうに捉えていただければ、良いんじゃないかと思うわけです。

世間の人達は本物の宗教に縁がないものですから、自分の力を信じて自分に迷い、自分に負けてしまっている。またお金や自力だけで心は買えな

い事に気づかない。心が濁っていれば決して本当の幸せを得ることはできない。このお題目こそが、本当に我われを幸せにしてくれるところの、導師であり、或いは主であり、親であることを心に留めていただいたら、結構かと思うのであります。

大変、長時間、失礼致しました。

〈目　次〉

祈りの心……1

現代人の祈り……1　祈りと感応……3　顕益と冥益……5　名聞名利と祈り……7
祈りと感得……9　よき師よき法よき檀那……11

現代に生きる信心……15

色あせた現代社会の理想……15　単純で強欲なアメリカ文化……19
知識偏重と感性・情緒……20　キリスト教信仰と天地創造説……22
国家神道と廃仏毀釈……25　一念三千と妙法受持……28
現代人の自我と本来の自己……30　円満具足の妙法……31

（『聖道』二二六号（平成29年2月一日発行）より転載）

祈りの心

平成二十九年三月十三日発行　発行所　〒五六三―〇〇五七　池田市槻木町一―一〇　源立寺内　恵日編集室